

先週の礼拝メッセージ(2021年7月4日)

「私たちの本来の姿」 エフェソの信徒への手紙 2:1-3 ベン牧師

今日から開きます2章1~10は、救いというものを個人の視点から捉えている部分です。1章では、神様の視点からの救いを学びました。さらに、2:11からは神の民、現在では教会という視点からの救いとはどういうものかが記されています。いずれもとても大切な部分です。

1節「さて、あなたがたは...」という言葉で始まっていますが、実はギリシャ語をそのままに訳すと、「また、あなたがたをも...」という表現になります。

つまり、1:19で「私たちに対して絶大な働きをなさる神の力がどれほど大きなものかを悟らせてくださるよう」と言った後で、神はその力をもって、十字架で死なれたイエス様を生かし、**蘇らせ**、天の御座に着かせてくださったように(1:20)、**私たち**をも(2:1)「罪のために死んでいたのに、その絶大な力によって神は生かし、**蘇らせ**、イエス様と共に天の御座に着かせてくださったのです」(2:4-10)に続いていくのです。1章の恵みが2章へと流れ込んでいるということです。このことを知って2章を読み進んでいくと、さらに大きな恵みを知ることになるでしょう。

さて、今日の箇所は、実は私たちが触れてほしくない、嫌な部分に聖書は光を当ててきます。私たちは本来は死んでいたというのです。以前とは、クリスチャンになる前は、という意味です。そうすると、今の日本ではほとんどの人が1~3節に当てはまるのではないのでしょうか。当然ながら私たちが以前はそうでした。

生きているという意味の言葉は、ギリシャ語では二つあります。一つは体の命(プシケー)があるということ、二つめは、心の命、つまり霊的な命(ゾーエー)があるということです。

イエス様を信じて持つ永遠の命は、まさに霊的な命です。1節で「死んでいた」というのは、この霊的な命がないことを指しています。そして霊的な命がない=死んでいると言っているのです。命がない私たちは、この世に流れに流されていたと聖書はいいます。

たとえば、台風で増水し、激流になった川でも、そこに住む魚は、たとえめだかのような小さな魚でも、嵐が過ぎると、流されることなく同じ場所に止まっています。命があるから流されないのです。反対に、どんなに高価のある大きな魚であっても、死んでいたらあっという間に流されてしまいます。命がないからです。

聖書は、「あなたたちも以前は罪を犯して、心の命がなく死んでいた者だった。だから、この世に流れに流されていたのだ」というのです。3節の「心の欲するままに生きる」ということは、言いかえれば、肉や心の欲望

に逆らう力がないということです。仕事や家庭が充実していたとしても、多くの人はこの力をもっていません。言葉で立派なことは言えるでしょう。一時的な満足や達成感を得ることができるでしょう。しかし、本当の平安、喜び、そして打ち勝つ力は持っていないのです。その結果、人を傷つけ、自分自身をも傷つけているのです。なぜそうなのか...あなたのうちに命がないからです。

でも聖書はそこで終わっていません。4節以降に「しかし、憐れみ豊かな神は...」と続くのです。

私たちの本来の姿、それは、命がないゆえに罪を犯し、罪に流されていた者であり、生まれながら神の怒りを受けるべき者だったのです。

神は愛です、その通りです。神様は私たちを**創造**し、私たちを救うためにひとり子イエス様を十字架にまでつけてくださった**ほどです**。しかし、そんな愛の対象である私たちの姿を見て、必ずしも喜んでくださっているかというと、それは違います。

ちょうど親が子を愛しているなら、その子が間違っただけをしたら悲しみます。**世の中には子供を愛しているのに悲しんでいる親御さんが**、どれほど多くいることでしょう。悲しみ、そして、その罪に対して怒りを覚えることでしょう。愛しているからこそです。

神様は、私たちを命懸けで愛してくださっているゆえに、罪を犯し続けている私たちに対して怒っておられるのです。しかし、神は素晴らしい恵みを用意してくださいました。それは、イエス様が十字架にかかって、私たちの罪を全てその身に負って死んでくださったことにより、私たちはもはや、神の怒りの対象ではなくなったということです。

「今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」(ローマ5:9) ハレルヤ!

イエス様の十字架によって罪赦され、神様の愛を**100%**受ける者とされたのです。もう神の怒りは私たちの上にはないのです。これを福音、幸いな知らせと呼ぶのです。

私たちは自分の本来の姿を知ることによって、私たちに与えられた神の恵みがどれほど素晴らしいものかを知ることができるのです。だからこそパウロは、「私たちは以前は死んでいた」という言葉で2章を始めるのです。

いのちがある、だから私たちは、どんなこの世の流れにも流されず、前進していくことができるのです。私たちに与えられているいのちの祝福を感謝しましょう。